OK-1-5

手続き記憶を介した作業的アイデンティティの再構築：
―高齢入所者へのポインセチア短日処理―
Reconstructing Occupational Identity via Procedural Memory:
―Short-Day Treatment of Poinsettias for Elderly Residents―

○杉浦まり (OT)[1)]，池田里美 (ケアマネージャー)[1,2)]，大部佐知 (介護士)[1,3)]，
北尾静香 (介護士)[1,3)]，瀬戸慶子 (介護士)[1,3)]
[1)]医療法人社団 董会 介護老人保健施設名谷すみれ苑リハビリテーション課，[2)]医療法人社団 董会 介護老人保健施設名谷すみれ苑名谷すみれ苑支援相談部，[3)]医療法人社団 董会 介護老人保健施設名谷すみれ苑ケアサービス部

Key words: 認知症高齢者，役割，多職種連携

【序論】施設入所による生活空間の限定や役割喪失は，自発性低下や見当識障害を増悪させる要因となる．先行研究では園芸療法の有効性が示されているが，植物の生理的特性を利用した「役割」提供が，手続き記憶や作業的アイデンティティ（作業を通じた自己認識）に与える影響の報告は少ない．本報告では，規律性と有能感を伴うポインセチアの短日処理作業に着目し，その臨床的意義を検討した．【目的】本介入を見当識訓練として位置づけ，対象者の「役割」定着が自己効力感や行動変容に与える影響を検討することを目的とした．【方法】対象は80歳代男性，老健入所中．ADL自立も自発性低下により「何もすることがない」との作業的疎外を呈していた．介入前のHDS-Rは10点であり，特に遅延再生（0点），見当識（1点）に課題を認めた．11月1日から50日間，24時間の生活場面に根ざした役割の再構築を目的に介入を実施した．介入内容はポインセチアの短日処理（毎朝の遮光段ボール除去，夕刻の被覆作業）とし，作業の習慣化を図った．「成長ノート」を併用し，日付記入と作業の自己チェックを促し，自己管理を支援した． OTが遂行状況の確認と意味づけの深化を行い，OT非番時はフロアスタッフが日常生活における声掛けと観察を担う多職種連携体制を構築した．これにより，訓練室に留まらない「生活の中の役割」としての担保を図った．評価指標は，1週間ごとのHDS-R，介入前後のFAB，COPMとした．本報告の趣旨を対象者および家族に書面と口頭で説明し，同意を得た．情報の匿名化を徹底し，当施設倫理委員会の承認を得て実施した．なお，本報告に関して開示すべき利益相反（COI）はない．【結果】HDS-Rは介入前の10点から2週目で向上し，経過中最高24点を記録するなど変動を経て最終20点で定着した．特に遅延再生（0→3点）と場所の見当識（5週以降2点安定）に改善を認めた．FABは12点から13点へ微増した．COPMは，遂行度1.0→8.0点，満足度1.0→9.0点と，いずれも著明に改善した．行動面では，1週目の長男氏との面会時，自ら作業内容を報告し肯定的な反応を得た直後，自律的に遮光作業を行う姿が観察された．作業手順は完全に保持され，6週目にはノート余白に娘氏の誕生日を自筆し，情動を伴う回想が認められた．介入後，自発的に「私の仕事ですから」と語るまでに自己効力感が向上した．介入終了後，窓際へ歩いていき，旧配置場所でポインセチアを探索する行動がスタッフより報告された．【考察】本症例はエピソード記憶障害が顕著な一方，手続き記憶は良好に保持されていた．HDS-Rが20点台で変動しつつ大幅に改善した点は，単なる認知機能の回復ではなく，本介入による自発性向上や「役割」に伴う覚醒レベルの維持，および情動的安定が検査結果に好影響を与えた可能性を示唆している．朝の作業定着においては，床頭台の環境設定と「水分補給」という既存日課が強力な手がかりとなった．朝のコップという視覚情報が成長ノートへの注目を促し，一連の作業手順を呼び起こす環境的トリガーとして機能したと考えられた．一方，夕刻に声掛けを要した点は，テレビ視聴や臥床等の受動的な生活状況が作業への切り替えを困難にしたと推察される．役割の定着には手順の反復に加え，生活動線や既存習慣に適合した環境的トリガーが重要であるといえる． 多職種連携により，リハの枠を超え「生活の役割」を担保した結果，「入所者」から「役割を持つ個人」への作業的アイデンティティの再構築が促された． 【結論】本介入は手続き記憶を介した役割創出に有効であり，作業的アイデンティティの再構築に寄与する．